



❁ 砂防での「気付き」❁



私は、土砂災害対策のうち、ソフト対策といわれる分野の仕事を多くしています。砂防えん堤の設置等により土砂そのものに影響を及ぼすハード対策とは異なり、土地利用や建築物の構造の規制、警戒避難といった住民の生活に関わって災害を防ごうとするソフト対策の効果は、地域の生活形態等に左右される面が多分にあります。特に警戒避難は、いつどこで発生するのか予測が難しいといった土砂災害の特徴もあり、一見その効果がはっきりしないような災害事例も珍しくはありません。しかしながら、それなりの人数の方が、防災情報の収集や避難等、警戒避難のための行動をとっている場合も多く、土砂災害という分野でこれだけの人を動かすことができるのは、各地でこれまでに積み上げられてきた砂防に対する信頼感のおかげではないかと思えます。土砂災害対策には様々な手法がありますが、土砂災害防止法が、ハード対策が追いつかない実情のもと制定された経緯、またこれから高齢化や人口減少が進むことを考えた場合、居住する地域の土砂災害の危険性を十分に知り、個々人や地域の事情に応じた避難方法を自ら検討できるよう全国で担保することは、とても難しいことですが、重要な仕事であると考えます。

そのような考えで仕事に取り組むなか、衝撃を受けたことがありました。それは、災害時の避難所等での性被害です。避難所は、災害が差し迫ったときに行くことが多い場所であり、心身に余裕がない人も多いと思われま。そうしたなか、助け合いですとか、きずなですとか、普段なかなか表に出せない善意が溢れる場所、という漠然とした認識でいました。またそうした認識で、土砂災害から身を守るためのだけのことを想定して避難を勧めていたことに、大変な恥ずかしさを感じました。もちろんそうした避難所ばかりではないのですが、一方で、女性に対し支援する対価としての性犯罪が起きる等、様々な問題が明らかになっています。土砂災害から身を守るための対策に、男女差はもちろん、心身の個性によって差がつくことのないよう、大勢の方が努力されています。しかしながらまだ、そうした差に応じて、気づきにくいところで、避難所に行きにくい、防災情報が届きにくい、防災訓練や講習会等で地域の危険性を知る機会を持ちにくい、といった状況が生じているのであれば、

今後、土砂災害対策を通じてさらに人的被害を低減するという目的の上でも大きな課題です。また、そうした状況にまずは気付くこと、そしてそうした状況に気付くことができる人が解決の機会にアクセスできることが具体的な課題となってきます。このように考えると、多種多様な人が砂防に携わることは、土砂災害を通じた人的被害の軽減にあたり、掛け声だけで終わらせてはいけなく、現実的な課題解決策の一つです。

砂防では、人の命に関わる仕事に携わっているためか、土砂災害対策の技術的内容の向上はもちろんのこと、現場で、人々の生活や山々を見ながら対策を練ることで、土砂災害による犠牲者を一人でも減らそうという挑戦意識が根本にあるように思います。そうした意識からは、多様性に対する理解不足はあっても無理解は生じないのではないのでしょうか。しかしながらそのため、大勢に共通するような問題とまでなることが少なく、改めて考える機会を持たない一因になりうるのかもしれない。

このところコロナ禍もあり、なかなか現地へ赴いての実態調査や対面での打合せができない状況です。私は正直、山に入ることも、車の運転も、初めてお会いする人とのコミュニケーションも、すなわち現地調査や打合せで比較的必要なことのすべてが苦手です。さらに極端な現場主義に対しては、現場ももちろん重要だけど、同じくらい現場以外のことも大事なのに…とってしまいます。それでも、これだけの期間、現地に行かない、対面で話さない、ということはなかなかありません。逆にWEB会議を使うことで、距離に関係なく色々な方と話すことができる便利さにも気付くことができました。これからは、現地調査もWEB会議も直接の対面での対話もと、色々な手段や機会を使って、「気付くことができる」技術者を目指したいです。また、私が仕事する上での困りごと、私自身すら見て見ぬふりしかけていたことも多くあるのですが、そうした困りごとに気付いてくれて、陰になり日向になり色々と助けて下さった、また助けて下さる方々に、一歩でも近づけていけたらと思っています。

(千葉 幹・(一財) 砂防フロンティア整備推進機構
砂防フロンティア研究所 研究第一部 主任研究員
兼 企画調査部 参事)